

「アビダルマ経」考

——abhidharma cakravartīsūtre の

用例を中心として——

並 川 孝 儀

仏教文献はすべて経、律、論という各々の形式を有しており、それらは、南伝、北伝での相違はあるものの、一般的に経蔵、律蔵、論蔵の三蔵に蔵されている。ところが、仏教諸文献中にはこの形式を逸脱し、それとは一見異なった如き題名を有する文献が少なからず見出せる。即ち、論と経とが合体した如き題名をもつ文献がそれである。今、その主要な文献が例示すると、安世高訳になり、五位法を主題とした『品類足論』弁五事品と同本異訳である『阿毘曇五法行經』^①、仏陀の成道より説き始められ、弟子の出家具足戒の作法に関する記述がなされ、諸律の「受戒健度」に相当する『仏阿毘曇經』出家相品第一^②、説一切有部の中期論書の一つである『阿毘曇心論經』等であり、そして文献中に記述されている例としては、『増一阿含經』中に三蔵の一つとしての論を「阿毗曇經」^③とする例、『攝大乘論』中に見られる「阿毘達磨大乘經」等の例を知ることができる。

これらに見られる題名に関して、その理由は種々事情が異なり、一定の見解を導くことは困難であろう。例えば、『阿毘曇五法行經』^④の場合もその見解は種々で一定していない。安世高訳と言われる訳經は『出三蔵記集』^⑤によると21部25卷（現存する訳經のみ）見られるが、そのすべてに經という名称が与えられており、『阿毘曇五法行經』と同様、『陰持入經』のような陰（蘊）、持（界）、入（処）というアビダルマ特有の論的内容について独立の課題を取り扱っている論書とも言うべき文献にも經名が与えられている^⑥。このような本来論書とも言える文献に經が付されている理由として、安世高における訳出上の技術的な

理由、当時の中国社会の事情を反映した結果^⑦、或いは権威付けのために聖教としての経名を付した等の推定^⑧がなされている。その真意のほどは判りかねるが、いずれにしても、上記の諸文献の名称の理由は、『阿毘曇五法行經』の場合と同様、各自、別個の事情によるものと考えられよう。これらの文献は漢訳であるという点よりして、訳出等に係わる問題を種々考慮に入れなければならない困難さを生じさせる訳である故、先ず原典に見られる用例を見出すことが重要である。これらの中、「阿毘達磨大乘經」だけはチベット訳より還元され *abhidharma-mahāyāna-sūtra* と原名が判明している故、直接的にその原義を考察し得る。この *abhidharma-mahāyāna-sūtra* に関する研究は既に先学により詳細になされており^⑨、今、ここでは部派仏教の文献に見られる用例を考察することを目的としているため、論じないが、「アビダルマ經」という論と經の合体を呈した名称の在り方に一つの示唆を与えてくれる。

部派仏教のサンスクリット文献中に、この「アビダルマ經」なる用例が見出せるのは *Mahākarmavibhaṅga* (MKV) と、その註釈書である *Karmavibhaṅga-opadeśa* (KVU)^⑩ においてである。筆者の知る限り、その他の文献にはこのような用例を見出すことはできない。上記の如き MKV, KVU といった特定の資料に基づくことにより、その用法が一般性を有し得るかどうかは疑問ではあるが、しかし限られた資料の中より、聖教としての *sūtra* に論を意味する *abhidharma* が付加されるといった特異な「アビダルマ經」なる用法が如何なるものであるかについて吟味されなければならない。既に、筆者はこの問題の一端を指摘したが^⑪、ここで更にその論を展開し、この用法について探ってみたい。

1.

「アビダルマ經」の用例はMKVで2度に亘り同一經典名が1例見られ、KVUには1例が見出せる。MKV と KVU にはその他にも多数の經典が引用されているが^⑫、それらの中で、上記の例だけが唯一、經典名の前に *abhidharma*

が付される特異な引用のされ方がなされていることから、そこに示されているであろう意義は注目されてよい。

先ず、MKV において2個所で引用される用例は *abhidharme cakravarti-sūtre* であるが、それを以下に示す。

[A] *yathā cōktam Abhidharme Cakravartisūtre. katamasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī hastyāśvādini vāhanāni pratilabhate. dirgharātraṁ rājā cakravartī mātaraṁ vā pitaraṁ vopādhyāyaṁ vā skandhena vahati vā vāhayati vā. hastyāśvādibhiḥ śivikāyānair vā vahati vā. durgasamkramaṁ vā karoti. setubandhaṁ karoti. upānahapradānāni vā dadāti. kāruṇyena mahāṭavyāṁ sārthaṁ atikrāmayati. tasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī hastyāśvādini pratilabhate. tatrārūḍhaḥ samudrapanyantām pṛthivīm divasacaturbhāgena paryatati.*^⑬

(訳) どのような業の果報によって、転輪聖王は象と馬等の乗物を得るのか。長い間にわたり、転輪聖王が母や父や師を肩にのせて運んだり、運ばせたり、象と馬に乗せたり、籠に乗せて運んだり、難路に道をつけたり、橋を架けたり、履物の類を贈ったり、慈しみの心で隊商に大森林を通してやったりする。この業の果報として転輪聖王は象と馬等を得る。また、それらに乗って大海にまで至る大地を1日の4半分の間に旅をする。

[B] *yathoktam Abhidharme cakravartisūtre. kasya karmaṇo vipākena rājñāś cakravartinaḥ strīratnasya romakūpebhyaḥ śarīrād gandho nīrgacchati. tad yathā gandhasamudgākasya. dirgharātraṁ tayā striyā caityagarbhagr̥heṣu gandhopalepanāni dattāni. surabhīṇi ca puṣpāṇi dhūpaś ca dattāḥ. stūpeṣu ca gandhasnāpanāni kṛtāni. tasya karmaṇo vipākena rājñāś cakravartinaḥ strīratnasya śarīrād evaṁrūpo gandho nīrgacchati. tad yathā gandhakaṇḍāśya.*^⑭

(訳) どのような業の果報によって、転輪聖王の女宝の肉体の毛孔より、香が出るのであるか。それは香料の筐の如くに。その婦人は長い間にわたり、仏塔 (caitya) の遺骨筐に香料を塗りつけ、そして香を放つ花と香を供え、そして仏塔 (stūpa) を香

水で洗ったからである。この業の果報によって、転輪聖王の女宝の肉体より、このような香が出るのである。恰も香料筐の如くに。

[A] は転輪聖王の七宝——輪宝、象宝、馬宝、珠宝、女宝、居士宝、主兵宝——の中の象宝、馬宝について、それは如何なる業の果報として得られるかに関して述べた引用文であり、[B] は如何なる業の果報として女宝が得られるかに関する引用文である。この *abhidharme cakravartisūtre* は如何なる經典であるかを考察するために、[A]、[B] の引用文を現存資料との比較によってその対応関係を調べなければならない。

転輪聖王の七宝を説示している經典は多数存在するが、それらの中で、特に七宝各論を説いている經典は *Bālapaṇḍitasutta* (MN. 129), 『雜阿含經』722 經, 『仏説輪王七宝經』, 『長阿含經』「世記經」転輪聖王品, 『増一阿含經』卷33・8 經等である。これら諸經典に説示される七宝各論の内容はほぼ同一であるが、これらと [A]、[B] を比較すると、両者間において、その説示内容は文脈上から全く別の伝承を示しているものと判明する。

上記の諸經典の他に七宝各論を論じた文献として六足論の一論である『施設論』を挙げることができる。[A] に対応する個所はチベット訳『施設論』(TPś) のみに存在し、[B] は TPś 及び漢訳『施設論』(CPś) 両者に対応個所が見出せる。今、[A]、[B] 各々に対応する個所を示すと以下の如くである。

[A] ci'i phyir 'khor los sgyur ba'i rgyal pos glaṅ po rin po chet hob ce na/ smras pa/ 'kkor los sgyur ba'i rgyal pos ni sdon gyi srid pa źes bya ba nas rgyas par sbyar te/ pha ma daṅ/ ñe du daṅ/ bla ma lta bu rnam daṅ/ kźan dge sbyoṅ daṅ/ bram ze rnam gnod par bya ba ma yin pa daṅ/ gnod par byab la mi dga' ba gaṅ yin pa de dag la bde bar sbyar ba rnam pa sna tshogs 'di lta ste/ glaṅ po che'i bźon pa rnam daṅ/ rta'i bźon pa rnam daṅ/ śiṅ rta'i bźon pa rnam daṅ/ khyogs kyi bźon pa rnam daṅ/ smyig ma'i 'khor ba rnam daṅ/ spa 'khor rnam daṅ/ khri rnam byin pa daṅ/ stegs 'char bcug pa daṅ/ gru daṅ zam pa rnam daṅ/ lham rnam byin pa daṅ/ de dag daṅ gźan yaṅ bde ba'i bźon pa rnam pa sna tshogs byin te/ rgyu des na 'khor los sgyur ba'i rgyal pos glaṅ po rin po che thob bo/

[B] 何因輪王女宝。身諸毛孔。有_二旃檀香_一。口中常出_二優鉢羅花香_一。答彼女宝者。往昔修因。其事广大。謂於_二父母知識及師尊所。并余沙門婆羅門衆_一。不_レ生_二惱害_一。而復愛樂_二不惱害者_一。即以_二沈水薰陸鬱金多摩羅等。及余上妙諸香_一。廣行_二布施_一。以_二如是因_一故。身諸毛孔。有_二旃檀香_一。口中常出_二優鉢羅花香_一。^⑩

ci'i phyir bud med rin po che spu'i luñ bu thams cad nas tsandan gyi dri 'byuñ la kha nas utpala'i dri 'byuñ ze na/ smras ba/ bud med rin po che sni sdon gyi srid pa zes bya ba nas rgyas par sbyañ te/ pha ma dañ/ ñe du dañ/ bla ma lta bu rnams dañ/ gźan dge sbyoñ dañ/ bram ze gnod par bya ba ma yin pa dañ/ gnod par bya ba la mi dga' ba gañ yin pa de dag la agaru dañ/ rgya spos dañ/ gur gum dañ/ ka ra nu sa ri dañ/ ta ma ma'i lo ma de lta bu dag dañ/ gźan yañ dri źim po rnams byin te/ rgyu des na bud med rin po che'i spu'i khuñ bu thams cad nas tsandan gyi dri 'byuñ la kha nas utpala'i dri 'byuñ ño/^⑪

[A], [B] は「世記經」等の經典での七宝の説示内容に比較して、TPś, CPś との対応関係の方が文脈上からも、はるかに酷似しており、同系の伝承であることを窺わせる。説示内容の筋立ての類似の他に相違点と言え、[A] に関しては tatrārūḍhaḥ samudraparyantām pṛthivīm divasacaturbhāgena paryatati に該当する部分が TPś にはなく、又、TPś が七宝を説く時、「世記經」等もそうであった如く、当然のこととして象宝、馬宝が別論されているのに対し、[A] は象宝、馬宝が共に論じられている点である。それ以外では、TPś の方が全体的に増広されている点である。[B] に関しては、TPś, CPś が花香による施こしを行なう、と説示しているのに対し、dirgharātram 以下 gandhasnāpanāni kṛtāni の部分で、花香や香水による塔供養との如く、塔供養が明示されている点が主たる相違点であり、それ以外では [A] の場合と同様、TPś, CPś に増広部分が見られる点にある。

さて、ここで論を元に戻し、abhidharme cakravartisūtre の用法について少し考察する。abhidharme と cakravartisūtre との関係を如何に理解するかによってその意味が異なる。MKV の引用經典と同じ 6 種の經典を引用する^⑫ チベット訳 *Karmavibhaṅga (Las rnam par 'byed pa)* (TKV) にも [A] [B] に関して記述されておらず、その両語の関係を示す資料は見出し得ない。一般

的にこの訳し方は2通りが考えられよう。先ず, *abhidharme* を compound しない *Locative case* の用法として考える時, (1)「アビダルマ論書中の *cakravartisūtra* に」と訳せ, 他方, 両語が本来 compound しているものを分離させた形として考える時は (2)「アビダルマ *cakravartisūtra* に」との如き固有名詞としての訳し方が可能であろう。この(1), (2)のいずれが適切であるかは, この両語形だけでは決定し得ないが, 上述した如く, [A], [B] が現存文献中, 唯一『施設論』と酷似している事実は恰も *abhidharme* の用法が(1)ではないかということを想起させる。ここで, この想起が果して適切であるかどうかを視点を変えて論じる。尚, この他, この用法に関してこれは *abhidharme ca cakravartisūtre ca* との如く, *ca* の省略形とも推察されるが, とすると, [A] と以下に示す *cakravartisūtre* が同一経典ということになり, 両者に生じている引用文の差異が説明できなくなる。そこで, この考え方は一応否定されるべきであろう。

MKV には [A] [B] の他に *cakravartisūtre* と *abhidharme cakravartisūtra-vibhaṅge* なる2例の引用文が見出せるが, それを [A], [B] との関連において眺めてみる。先ず, *cakravartisūtre* との出典表記を有す引用文を示すと,

yathā *Cakravartisūtre* uktam̐ Bhagavatā. kasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī hastiratnāny asvaratnāni ca pratilabhate. dīrgharātram̐ rājā cakravartī mātaram̐ pitaram̐ vā svayam̐ vā skandhe vahati vā rathādibhir vāhayati vā. ācāryopādhyāyān svayam̐ vahati vāhayati vā. tasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī hastyaśvaratnāni pratilabhate.^⑩

この引用文に説かれている内容は [A] と文脈上ほぼ一致しているものの, [A] の方が増広された内容を有し, 又, [A] と出典表記が異なっている点より [A] とは相違した文献であることを窺せる。これを裏付ける資料として, TKV に上記 *cakravartisūtra* とほぼ同一の引用文が挙げられるが, そこでは, 「bcom ldan 'das kyis 'khor lo sgyur ba'i mdo las gsuñs pa」と明かに引

用文として取り扱われている点よりする時、この引用文は内容の相似性は別として、出典表記の如く、[A] とは別個のアーガマ文献として位置付けられなければならない。

他の 1 例である *abhidharme cakravartisūtravibhaṅge* の引用文を以下に紹介する。

yathā cōktam *Abhidharme Cakravartisūtravibhaṅge*. kasya karmaṇo vipākena rājā cakravartī maṇiratnaṁ pratilabhate. dirgharātraṁ rājñā cakravartinā dipapradānāni pradattāni. pradīpaikadānāni ca. andhakāre ratnapradīpā dhāritā. ye cakṣuṣmantas te samaviṣamāṇi rūpāṇi paśyantu.^②

(訳) どのような業の果報によって転輪聖王は珠寶を得るのか。長い間にわたり、転輪聖王が燈明を供養した時である。そして、それも燈明だけを供養した時である。暗黒において、宝の燈明がもたらされたように、眼をもった人々はこの世のすがたを見ることができる。

この引用文は七宝中の珠寶に関して説示されたものであるが、この文は他の現存文献中にその対応箇所を見出すことができない。[A], [B] が TP₆ に対応箇所を有した如くには、TP₆ の珠寶の説示部分と対応しないということは、この引用文が [A] [B] とは異なった文献であることを示しているのではないかと考えられ、更に、これは *cakravartisūtravibhaṅga* と *-vibhaṅga* が付加された題名を有していることから、[A] [B] とは異なり、その註釈文献ではないかと推定できる。このように、MKV に所収された上記の 4 例、即ち、*abhidharme cakravartisūtre* (2 例)、*cakravartisūtre*, *abhidharme cakravartisūtravibhaṅge* は各々別個の 3 種の文献であることを表明しているのであり、ここに、MKV において一連の *cakravartisūtra* の或る伝承の展開——*cakravartisūtra* → *abhidharme cakravartisūtra* → *abhidharme cakravartisūtravibhaṅga*——が見事に提示されているものと言えよう。

abhidharme cakravartisūtre の *abhidharme* を如何に理解するかについて

この一連の展開の視点より考察する時、これを「アビダルマ論書中の」と解することに疑問が生じる。仮に abhidharme を「アビダルマ論書中の」と解するなら、[A], [B] はアビダルマ論書（この場合、『施設論』と考えられるが）中に引用された經典と付置付けられることになり、この一連の展開を考え合わせ時、先ずアーガマとしての cakravartisūtra が存在し、別個に伝承されつつも、それが増広、改変され論書中に表われ、その部分が後に註釈されるといった経過に至るという推定が成り立つ。しかし、この推定には問題が残る。abhidharme を「アビダルマ論書中の」と解せば、abhidharme cakravartisūtravibhaṅga も論書中に cakravartisūtravibhaṅga なるものが引用されていなければならないが、その引用が末見出の現在、この意味では abhidharme の説明が付かなくなる。当然のこととして、この cakravartisūtravibhaṅga は独立した文献と見做さなければならないであろう。とすれば、この abhidharme とは単に「アビダルマ論書中の」との意味を有するものではないことになる。この abhidharme も [A], [B] の abhidharme と同一用法であることは間違いのない点よりすれば、結果、[A], [B] も「アビダルマ論書中の」として abhidharme を解する合理は存在しないことになる。この点からも、上記3種は各々独立した文献と見做すことが妥当であり、上述の如く、一連の或る伝承を示した資料と位置付けるべきであろう。これよりこの abhidharme の用法は何であるかについて更に論を進めなければならない。しかし、その前に、MKV の註釈書 KVU にも同様の用例が見られるので、ここでそれを示す。

yathoktaṁ Bhagavatābhidharme *Bālakāṇḍasūtre*. ekacittaprasādasya vipāko varṇitaḥ. yadi Ānanda saṁsāre saṁsarataḥ ekacittaprasādasya vipākena saptakṛtvaḥ parinirmītaśavartīṣu devaputro rājyaṁ kārāyati saptakṛtvo nirmāṇaratiṣu. saptakṛtvaḥ sukhiteṣu. saptakṛtvo yāmeṣu deveṣu devaputro bhūtvā rājyaṁ kārāyati śaṭtrimśad indrarājyaṇi kārāyati dvāsaptati mahārājikeṣu deveṣu rājyaṁ kārāyati cakravarti-

rājyānām koṭikoṭīnām rājyāni kārayati. yadi na rājyaṁ tata idam ekacittaprasādasya phalam. api ca sarvaśrāvakabuddhenāpi bhūyate.^⑧

(訳) アーナンダよ、もし一心に浄信する果報によって生存の輪を流転するなら、〔その人は〕7度、神の子となって化樂自在天の国を治める。7度、化樂天を治め、7度、樂天を治め、7度、夜摩天に神の子となって国を治める。36度、帝釈天の国に君臨する。72度、神妙天の国に君臨する。無限なる転輪聖王の国に君臨する。そして、もし、王国がこの一心に浄信する結果でないなら、また、一切の声聞〔縁〕覚によっても得られる。

出典名が *abhidharme Bālakāṇḍasūtra* なるこの引用文は比定し得る文献を他に見出すことができない。*Bālakāṇḍa* と言えば *Rāma* の少年期を扱った *Rāmayaṇa* 第一篇の題名であるということ以外何も知り得ない。これに比定し得る文献が判明すれば、この問題に対しより確実な論証資料を提供することであろう。

2.

abhidharme cakravartisūtre の用法は前項で「アビダルマ論書中の *cakravartisūtra* に」、*「アビダルマ cakravartisūtra に」* の意に解することの難しさを述べた訳であるが、これより、その更なる意味の可能性を論究しようとするものである。

KVU の末尾に MKV の意義を説明した後、次のような記述が見られる。
tasmād api Mahākarmavibhaṅgaḥ. gotrāntariyānām Abhidharmasamyukteṣu.^⑨

この文を訳せば「こういう理由で *Mahākarmavibhaṅga* である。〔これは〕諸々の他部派では *Abhidharmasamyukta* に〔蔵される〕。」とでもなろう。^⑩
 この資料は種々の問題点を提起する。*abhidharmasamyukta* は「論に相応する」、「論に付随する」といった意味になろうが、これが Locative case である点より、*Mahākarmavibhaṅga* が収められる何か蔵のようなものを示唆し

ているのではないかと解せる。とすると、この abhidharma とは「アビダルマ論書」を意味しているとしても、結局のところ、「論藏」(abhidharma-piṭaka) の如き意味を指し示しているものと考えられる。故に abhidharmasaṃyukta とは「論藏に相応する」或いは「論藏に付随する」といった意味になる。そして、-saṃyukteṣu と複数形で表現されている 事実はこの abhidharmasaṃyukta という形式が3以上の部派に保持されていることを教示しており、Mahākarmavibhaṅga はその複数の部派で abhidharmasaṃyukta に収められていることが知れる。尚、この場合、「諸々の他部派では」とある故、ここである Mahākarmavibhaṅga は、現存する梵文 MKV ではなく、恐らく『仏為首迦長者説業報差別經』、『分別善惡報應經』、TKV (大谷目録6724) 等の類似經典であろうことは言う迄もない。上記の資料は、又、MKV が特定の部派(筆者は正量部系と考える^⑧)に所属しているということも示唆している。ところで、「Mahākarmavibhaṅga は諸々の他部派では abhidharmasaṃyukta に〔藏される〕。」ということは、恰も MKV の所属部派が abhidharmasaṃyukta なる形式を有さない如くに解釈されるが、しかし、この文は必ずしもそのようには記述されていない。むしろ、これは単に Mahākarmavibhaṅga の場合に限定して、他部派ではそれを abhidharmasaṃyukta に収められると述べたものとして理解されるべきであろう。とすれば、MKV の所属部派も abhidharmasaṃyukta なる形式を有していないとは必ずしも言えない。

MKV は鸚鵡經典類であり、その中において TKV、『分別善惡報應經』等と同様に、阿含の鸚鵡經典類である『仏説鸚鵡經』、『仏説兜調經』等とは説示内容、經構成等において異なった伝承に位置付けられる訳であるが、その相違の更なる根拠として上記の KVV の記述が挙げられる。即ち、阿含と異なった伝承とは、MKV がこの abhidharmasaṃyukta に藏されることにより知れる。そこで、MKV を位置付ける時、MKV は阿含經典を所依としつつも、それを展開した部派の所産と考えられ、そして經藏とは異なった、しかも教義書のみを藏する論藏とも異なった、或いは、相応せる一つの形式 abhi-

dharmasaṃyukta が存在し、そしてそこに収められたのではないかとの見解が生じる。要するに、MKV は部派が阿含伝承とは別に独自に阿含を増広、改変した經典を作製し、それを阿含經典と区別して保持していた一例ではないかと考えられるのである^⑧。恐らくこのような例に当てはまる文献は他にも存在するであろう。

MKV の所属部派も MKV 自体を abhidharmasaṃyukta に収めてはいないものの、矢張り、この如き形式を有していたのではないかと考えられるかも知れない。そうすれば、MKV 中に見られる abhidharme の用法とに関連性が見出せることになる。*abhidharme cakravartisūtre*, *abhidharme cakravartīsūtravibhaṅge* に共通して、矛盾のない abhidharme の用法が考えられなくてはならない故、前項で述べた如く「アビダルマ論書中の」との意味では、この用法は解決されない。ここにおいて、abhidharme は abhidharmasaṃyukte と同一用法であると見做すことによって、その問題は解消されるのである。限られた少数の資料で論じる困難さは残るが、abhidharme とは abhidharmasaṃyukte の意味を有し、一種の蔵の如き形式を意味しているのではないかと考えたのである。

このような abhidharmasaṃyukta の記述は KVU 以外の文献に見出すことができない故、如何ほどの資料的意義を有するものかは多少疑問を残すが、しかし、視点を変えれば、複数の部派に存在したとの記述は、比較的一般性を有している資料として取り扱えるかも知れない。いずれにしても、この形式は恐らく仏教文献編纂史上において、ほとんど重要視されることのなかった事例であると考えられ、又、一方で比較的后代の仏教事情を反映した資料であるとの推定も可能であろう。

3.

ここでは、南方所伝のパーリ文献に見られるこの問題に関連するであろう資料を少し眺めてみる。

小部經典の取り扱い方について、*Sumaṅgalavilāsini*^②に見解の相違が紹介されている^③。それは *Dīghabhāṇaka* (長部師) と *Majjhimbhāṇaka* (中部師) とが小部經典の分類をめぐって異なった立場を取っている、との記述である。それによれば、*Majjhimbhāṇaka* はすべてを經藏に収めるのに対し *Dīghabhāṇaka* は *Jātaka*, *Mahāniddeśa*, *Cullāniddeśa*, *Paṭisambhidāmagga*, *Suttanipāṭa*, *Dhammapada*, *Udāna*, *Itivuttaka*, *Vimānavatthu*, *Peta-vatthu*, *Theragāthā*, *Therīgāthā* の12經を *Khuddakagantha* と称し、論藏に収める。*Dīghabhāṇaka* の立場の如く、この經典等を教義書を藏する論藏に収めることは一見不可解に思えるが、パーリ仏教で論藏と言えば、七論を指し示すことを考え合わせ時、それは恐らく論藏の appendix のようなもの^④として考えられていたのであろう。ここに、經典も論藏に収められるという事実、及び論藏の appendix の如き存在を確認することができるのである。

これに関連して、『解脱道論』で *Paṭisambhidāmagga* と *Niddeśa* が引用される時、これらが「毘曇」や「阿毘曇」との名称で呼ばれている事実は、上記の *Dīghabhāṇaka* の見解と一致する。この「毘曇」、「阿毘曇」との名称は論書を指し示しているだけではなく、論藏をも意味しているかも知れない。しかし、*Paṭisambhidāmagga*, *Niddeśa* を「毘曇」、「阿毘曇」と呼称している限り、それは「論書的な書」の意味を含んだものと理解されることは当然である。そして、このような呼称方法は『解脱道論』を所伝した無畏山寺派だけではなく、南方上座部全体に亘って用いられたと推察できる^⑤。

このように見てくると、何か *abhidharma*, *abhidharmasamīyukta* の用法との類似性が想起させられる。いずれにしても、このパーリ文献に見られる資料^⑥内容は北伝の *MKV* や *KVU* の記述と、どのように関連付けられるかは、更なる詳細な研究をまたなければならないが、「アビダルマ經」を考える上での一つの資料とはなり得るであろう。

以上、*abhidharma* の用法について考察してきた。北伝の論藏は発智、六足論に限定されたものではないにしろ、教義書を藏していたことは事実であり、

經藏はアーガマ經典を藏し、律藏は律典を収めていたことは周知の事実である。それでは部派時代に作製された、このカテゴリーに入らない諸文献はどこに収められていたのであろうか。その疑問に対して、ここに、一つの仮説が成り立つ。論藏は經藏、律藏に比較して後世教団人の個性を受け入れ、これを反映する性格を有し、最も大きく展開した歴史をもつ^③。故に、他の二藏に比して、論藏のもつ性格は最も柔軟であったと考えられる。ここにおいて、論師が作製したという点で、この如き諸文献は論藏と関連付けられるのが最も妥当性があったと推察しうる。そこで、そのような文献は何か論藏の appendix(abhidharma-samyukta) のようなものとして位置付けられていたのではないかと思われるのである^④。ただ論藏の appendix という表現に問題が残るとしても部派仏教の編纂上の問題を示唆しているものとはだけはいうるのであろう。いずれにしても、本小論は試論の域を出ず、危険な論述もあり、その点に関しては今後の研究課題としたい。

註

- ① 宇井伯寿『訳経史研究』(岩波書店 昭和46年) pp. 380-410 に詳細な訳・註研究がなされている。
- ② 平川 彰『律藏の研究』(山喜房仏書林 昭和35年) pp. 264-5 宇井伯寿『印度哲学研究』第六(岩波書店 昭和40年) pp. 80-81 Shizuka Sasaki; *Fo-ê-p'i-t'an-ching-ch'u-chia-hsiang-p'in* 佛阿毘曇經出家相品: its relation with Śālistambasūtra and Catuṣpariṣatsūtra, 『印仏研』33巻(予定)
- ③ 大正藏2巻 p. 550・c 尚、この個所は対応する AN には存在しない。
- ④ 大正藏55巻 p. 5・c-6・b 安世高訳として34部40巻が挙げられるが、現存しているのは21部25巻である。
- ⑤ 安世高訳と確実に見做せる經典は『安般守意經』、『陰持入經』、『人本欲生經』、『大道地經』の4經と言われる。林屋友次郎「安世高訳の雜阿含と増一阿含」『仏教研究』1巻2号 pp. 16-20
- ⑥ 論書に經が付されている例として、『阿毘曇毘婆沙論』(大正藏28巻 p. 29・a, 70・a, 93・a, 147・c, 199・b etc.) に六足論中、五論が各々「法身經」、「法陰經」、「施設經」、「識身經」、「波伽羅那經」として訳出されている。
- ⑦ 宇井伯寿 前掲書・註① p. 390

- ⑧ 山田龍城「アビダルマ五位の創唱」『文化』21巻5号 p. 543
⑨ 高田仁覚「阿毘達磨大乘經について」『密教文化』26号 pp. 20-35 片野道雄「撰大乘論の造論の意趣について」『仏教学セミナー』32号 pp. 21-26 長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解上』(講談社 昭和57年) pp. 28-33 等。

abhidharma-mahāyāna-sūtra における abhidharma- の用法は本小論での結論と関連付けられるのではないと思われる。即ち、大乘仏教学派における論蔵の問題と関連するかも知れない。瑜伽行唯識学派の論蔵に関する論文として、早島理「経律論 —MAHĀYĀNA SŪTRĀLAMKĀRA 第1～4偈— 長崎大学教育学部『社会科学論叢』33号 pp. 33-51 参照。

- ⑩ Sylvain Lévi: *Mahākarmavibhaṅga et Karmavibhaṅgopadeśa*, Paris 1932 尚, これは *Buddhist Sanskrit Texts*-No. 17 *Mahāyāna=Sūtra=Samgraha*, Part 1. pp. 177-220 にも収められている。
⑪ 拙稿「Cakravartīsūtra について」『印仏研』32巻2号 pp. (55)-(58)
⑫ MKV 所引經典の研究としては、拙稿「Mahākarmavibhaṅga 所引の經・律について」『仏教大學研究紀要』68号 pp. 53-76 MKV と KVV の引用資料をまとめたものは、S. Lévi op.cit. pp. 10-11
⑬ S. Lévi op.cit LXX. p. 94 ll.7-15
⑭ ibid. LXXVI p. 103 ll. 6-12
⑮ TTP. Vol. 115 59-3-6~4-2
⑯ 大正藏26巻 p. 514 ・ b
⑰ TTP. Vol. 115 61-3-7~4-2
⑱ 拙稿・註⑫ pp. 58-61
⑲ S. Lévi op. cit. XXXII p. 59 l. 21-p. 60 l. 5
⑳ TKV の引用文は以下の如くである。

de yañ bcom ldan 'das kyi 'khor lo sgyur ba'i mdo las gsuñs pa.

las kyi rnam par smin pa gañ gis 'khor lo sgyur ba'i rgyal po glañ po rin po che dañ rta rin po che 'thob ce na. de ni pha ma khur du khyer khyer ba dañ glañ po rta dañ śiñ rta la sogs pa la bskyed pa dañ mkhan po dañ slob dpon bdag gis bkur ba dañ. gzan la bskyon pa'i las kyi rnam par smin pas. 'khor los sgyur ba'i rgyal po glañ po dañ rta rin po che thob po zes gsuñs pa lta bu ste. (TTP. Vol. 39 121-3-4~6)

- ㉑ S. Lévi op. cit. LXXV. p. 102 ll. 1-5
㉒ ibid. p. 155 ll. 1-9
㉓ ibid. p. 167 ll. 12-13

- ②④ S. Lévi はこの文を「D'autres écoles (le placent) dans les Abhidharmasaṃyuktas.」と訳している。op. cit p. 181
- ②⑤ 拙稿「Mahākarmavibhaṅga の所属部派について」『印仏研』33巻2号（予定）
- ②⑥ この問題の詳細は、拙稿「鸚鵡経類の展開——特に Mahākarmavibhaṅga を中心として——」『仏教研究』第14号 pp. 27-43 この論文で〔Ⅱ〕類に位置付けた経典群は漢訳2経を含むが、それらは題名に経が付されているものの、Skt., Tib 訳と同様、原名に-vibhaṅga が付されたものと推定できる。とすれば〔Ⅱ〕類経典群は-sūtra ではなく、-vibhaṅga の文献群となり、この点からも明確に〔Ⅰ〕類と区分できよう。これによって、〔Ⅱ〕類と abhidharmasaṃyukta との関係も一層、意義を有することになる。
- ②⑦ PTS 版 Vol. I p. 15
- ②⑧ これに関する詳細は E.W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, p. 24 55. 1946. 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』（山喜房仏書林 昭和39年），pp. 690-694
- ②⑨ T.W. Rhys Davids: *Buddhism, its History and Literature*, p. 65 ff. 1926
- ③⑩ 水野弘元「解脱道論と清浄道論の比較研究」『仏教研究』3巻2号 p. 121
- ③⑪ 森 祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』（山喜房仏書林 昭和59年）pp. 183-184
- ③⑫ この他に *Atthasālinī* (PTS 版 p. 28) に abhidhammasutta なる術語が見られるが、この場合は「アビダルマより経を引用して」(Abhidhammato suttaṃ āharitvā) と説明があり、Abhidhamma が Ablative case になっている。又、この sutta も前後の関係よりして、聖教（アールガマ）を意味しないことを考える時、この術語は本小論とは直接関係する資料とは言えない。
- ③⑬ 山田龍城「パーリ系仏教にどうして大乘は育たなかったか」『文化』21巻6号 p. 26
- ③⑭ 部派が、如何なる蔵を有していたかに関して、それは必ずしも三蔵だけではなかったようである。大衆部は三蔵の他に雑蔵、呪蔵、法蔵部は呪蔵、菩薩蔵、犢子部は明呪蔵を有していたと伝えられる。尚、この問題に関して、後代のパーリ所伝文献の *Sārasaṃgaha*, 13世紀のシンハラ語文献の *Nikāyasamgraha* 等に関連記述が見られるが、これに関しては別稿で論じる予定である。ところで、ここにいう疑問に関連して雑蔵に注目したいが、これは如何なるものかあまり定かではない。雑蔵には三蔵に収められない文献群がまとめられたものと推測できるが、雑蔵を保持したとの記述のない諸部派も当然のこととして、この如き文献群を有していであろう。とすると、その部派ではそれら文献群を如何なるカテゴリーに収めていたかという疑問が生じる。南方上座部では三蔵の形態を固持し、全く別個の *Aṭṭhakathā* のカテゴリーを生み出したが、北方の大衆部を除く諸部派の場合は不明である。本小論に

いう *abhidharmasaṃyukta* を何か蔵の如き形式とすると、雜蔵と形式上より何らか類似性があるかも知れない。この前提に立てば、この形式は三蔵に固執し、その形態を守ろうとする諸部派が、唯一、論師の手になり、時代によって変容する度合の大きい論蔵に、雜蔵に相対する文献群を何らかの形で収めたのではないかと推定できる。しかし、以上の論述はあくまで仮説であると断わらなければならない。尚、この問題に関連して、トルファン出土の *sūtra* 註釈文献の編纂史上の位置付けも考察されなければならない。

(文学部専任講師)